

桂信子の句

桂信子の季題別全句集より小生好みの句を拾った。
新年、春、夏、秋、冬の基、
時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物の括
りで
句を並べた。

■桂信子の句 「新年」編

▼時候

年向ふ円き器に円き水
万物の一塵として年向ふ
往生に「大」をつけたき今朝の春
白波も今年の景となりゆけり
去年今年沖の真闇を船すすむ
いつときの血気なつかし去年今年
波の穂を捉ふ燈台去年今年
地にこもる都会のひびき去年今年
ホテルのカーテン襲ふかくして去年今年
喪にこもり元日の陽をわが膝に
元日の鳥が来て鳴く裏の川
雨ゝことに壺のまわりの暗い元日

元日の川波明り窓にくる
元日の常着や浜に犬つれて
元日の大空を陽のゆきわたり
元日のホテルの窓の波ばかり
くれかかる二日の壁があるばかり
山容の二日は雲にまぎれけり
山河の河を雲ゆく三日かな
三日とも日当りのよき暈かな
三日はや机の下に白紙落ち
地震あとの声松過ぎの家々に
忘れものせしやうな昼小正月

▼天文

声なくて一部屋づつの初明り

たたみ目のゆがみし国旗初日に出ず
海底に藻の色顕ちて初日の出
初日の出熊野一円おしだまる
湖の面をつたふ光や初日出づ
初日出で限りなくくる波の金
太古より光は真直ぐ初日出づ
一滴に初日あたり松雫
初御空より一本の鞭の影

▼地理

▼生活

日中の太い日がさす注連飾り
鏡餅なければ嫁が君も来ず
身にひそむ気の充ちゆきて初湯かな
テレビよりわけのわからぬ初笑ひ
初鏡いつまで生くるつもりなる
初夢のかごめかごめの国に居り
賀状うづたかしかのひとり来らず
初旅や練り歯みがきのひとつねり
初旅のまづ富士見ゆる窓がよし
松が枝をくぐりて来たり初扇子
初扇胸高といふ言葉あり
追羽子や山川つねの姿にて
幼な児にいくつ数ふる手毬唄
破魔矢受く巫女の口紅だけ見えて

▼行事

両眼に暈目茫と七日粥
石段の変らぬ堅さ 初詣で
裏山は松が枝ばかり初詣
森深く人の温みや初詣
閻王の舌を見上ぐる初詣
初詣人出の先の見えぬまま
暁闇に人の声する正恵方

▼動物

▼植物

裏白のみどりの仔細 老あたらし

▼無季

海を視る海は平らにたゞ青き

今日よりの働く顔とむきあへり

今日よりの勤めのわれに固き椅子

玻璃のなか湯気こもらせてひそと母

ふるさとの座蒲団厚し坐り切り

皮の匂いの一画 日向の靴直し

鯛あまたいる海の上 盛装して

じっと見つめる何かがあつて亀あるく

老婆去り水際に浮ぶ捨て青菜

奥祖谷の水をはねては水車

山の湯を出て蓮根の酔の匂い

色鯉に神田川より引きし水

昭和果つ真夜の豆腐の水底に

小虫匍ふ日あたつてゐる泥の上

藁焚くやおのづからなる灰の色

鹿刺を食うべしあとの顔ばかり

水中の色鯉自在吾は仰臥

色鯉と共に舞はむと水底に

彼の世にても指揮棒握りいざ「第九」

■桂信子の句 「春」編

▼時候

播粉木のどこやらにある春の家

雑草に春の気配の風かこれ

傾ぎし家どうにか春となりぬたり

春の航波の綺羅よりはじまりぬ

どこからか春はくるなり目つむれば

はるの地震いまさらどうなるものでなし

まさに春孔雀の羽根の揚げやう

九十の春いまだ読みたき書のあり

九十の春いまだ行きたきところあり

九十の春いまだ知りたきことのあり

ときどきは音立てなほす春の滝

ふてぶてしく春の金魚となりゆける

浮き出でて顔の大きく春の鯉

汚れゐる本のカバーも二月かな

松の根のあらはに二月過ぎにけり

かはらけの宙とんでゆく二月かな

大正昭和二月の雪は深かりし

しろがねの太刀欲し二月ともなれば

旧正の白波に佇つまひるかな

立春の積木の家を指くぐり

春立つ日シャボンの泡の中に居り

春来るや身の底を海とどろけり

春立つや音たてて矢を放つ風

あけぼのの色そのままに春きたる

音頭とるつもりなけれど「春がきた」

浅春や闇へひろがる松の枝

春寒や昨日からある雲丹の瓶

春めきてきしか何やらむずかゆし

遠山に日ざし衰ふ二月尽

目の端に水が光つていて二月

三月の下駄箱暗き小学校

三月は曲りくねりし松の枝

燻れる生木三月終りたり

きさらぎの水のひびきを夜も昼も

如月の鯉を一刀両断す

きさらぎのいづれの星となりたまふ

きさらぎの夢のつづきのきれぎれに

啓蟄や曇り硝子に灯のともり

啓蟄や音なく濡るる庭の樹々

紙屑を焚けば彼岸の炎色立つ

川舟の舳先の揃ふ彼岸寒

宿の畳にべったり坐る四月かな

四月逝く柱鏡に空映り

さざなみの滋賀に弥生のひと日かな

清明や砂搔きつづく放ち鶏

春日向匏次第に早くなる

春の昼匙落ちてよき音たつる
食堂に松風通る春の昼
春昼を動きづめなる鶏冠の朱
白湯たぎる音となりつつ春の昼
鮪くうて皿の残れる春の暮
蜜なめて黒腫かがやく春の暮
地に添うて鶏の一日春の暮
春暮とも知らず水槽の眼なし魚
山の音こだまにかえる春の暮
相模野の春暮になじむとりけもの
窓を出てシヨパンの高貴春の暮
水道管地中に岐れ春の暮
立つ波の白き尖りも春の暮
播粉木の音のなかなる春の暮
如雨露より水のやさしさ春の暮
遠く来て名もなき川の春の暮
永き日の「羽衣」を舞ひをさめける
永き日の鼓きこゆる廊流し
花冷えの夜は眼をひらく陶器の魚
密封の壺の重さよ木の芽風
木の芽風漆黒の膳拭き清め
穀雨として燈明の芯かきたつる
水の面を影の過ぎゆく穀雨かな
春ふかく芋金色に煮上りぬ
暈より立つ影八十八夜なる
紺暖簾奥の八十八夜かな
人の葬暮春の水を汲むばかり
大海亀の涙を憶ふ暮春かな
護摩の火の燃えさかる間も春逝ける
逝く春の林のなかの水たまり
逝く春を惜しむ間もなくあれやこれ
逝く春をおくる心の綾さまざま
門内の大きな壺と春惜しむ
ばんやりとしてあていつか夏近し

▼天文

春月や川面に何の水煙
おぼろより仏のりだす山の寺
村々や臙のなかに鳥睦み
夜陰よりおぼろに入りし松の幹
臙音して寄りくる舟も臙かな
臙より立ち上りくるものの影
どこまでも橋伸びてゆく夜の臙
舟べりに鱗の乾く涅槃西風
春疾風帆船硝子瓶のなか
倦める身に春雨絶えず幹つたふ
春雨来て病廊せばむ配膳車
菜種梅雨念仏の膝つめあわせ
菜種梅雨灯明の輪を幾重にも
レコードのかすれしダミア春の雪
音のなき越後や湖に春の雪
夜の町は紺しぼりつつ牡丹雪
灯は水にまたたきはじめ牡丹雪
牡丹雪まばらに人の顔の見ゆ
鮪にぎる手がガラス越し春霞
母へ濁す言葉の端よ別れ霜
手を触れて鳥のぬくみの夕霞
白粥に霞みし山河ひろがれる
洛中の霞める日々を稽古笛
ことごとく雑木山なり霞みけり
行平にただよふ飯や昼霞
立山のあるべきあたり朝霞
花ぐもり庖丁きれぬままつかふ
さきがけてわが部屋灯す春夕焼
▼地理
春の山短かき柵をめぐらせり
水一筋末黒となりし野を流る
春水のきらめくに似て過ぎし日は
くるぶしの際ぬけてゆく春の水
おもむろに首のべし鹿春の水
春の水美髯の鯉のあらはるる

鶏の羽ちらばっていて水温む

水温むころの思ひ出あまたあり

厨水春川に入る音を立て

眼前の有刺線他は春の湖

春潮の齒並くり出す雲の午後

春潮の幾重も夜に入らむとす

橋裏に光のあそぶ苗代寒

残雪の裏山見えて古時計

身にひびく音ごとごとく雪解音

光りあつめる一本の杭雪解川

街道の昼絶え間なき雪雫

舞殿を雪解雫の囲みけり

薄氷の真下の水に鱒の紅

薄氷の池をまぶしみ奈良茶漬

薄氷に遠く日あたる林あり

薄氷をのせたる水の動きけり

▼生活

塗椀の重くて母の木の芽和え

日を浴びる雀を屋根に蜆汁

日当るやうぐひす餅の粉膝に

雨はじく傘過ぎゆけり草餅屋

草餅のだんだん重くなつてきし

すぐ横に看板のある桜餅

湯呑置く粗拭きの盆桜餅

桜餅何もなき山眺めけり

さくら餅仏間を通りぬけにけり

雛菓子にすこし日あたる母の留守

雛菓子の紅毎年のことながら

鉄燭の春の灯となりあたり

鹿の首壁より出でて春暖炉

竈の火片側にうけ種袋

野遊びの着物の湿り老夫婦

学校の裏の道ゆく蕨狩り

見えかくれてそれぞれに梅を見る

梅見頃花よりもまづ坐らねば

夜桜や影の大きな人往き来

誰彼のわが前よぎる花篝

行くひとの背を照らしゐる花篝

中空にとどまる凧も夕陽浴ぶ

凧糸の白きひとすじ身より出て

まつしろな猫に睨まれ春の風邪

春愁の夕べを帰る手の汚れ

春愁もなし梳く髪のみじかければ

春愁や着馴れし服の匂ひにも

暗幕の裏の緋色や入学期

▼行事

竈よりとり出す烈火一の午

初午や白波つづく裏社

初午や結び疲れの赤い紐

初午や灰かぶりゐる道の草

戦後脛長き少女の雛祭

雛まつる壁裏昼の物音す

雛の日の日向かたよる石畳

雛の灯を消して仏間と闇かよう

雛壇に半日おかれ母の眼鏡

卓袱台をもたせし壁や雛の日

崖降りるひと見えてゐる雛の日

大方は雛人形の箱と見し

雛の眼にただ亀甲の松の肌

いっかうにvari映えせぬ雛の膳

整へるものの哀しみ雛の眼

炎上せし雛の叫び暁の雨

雛の顔夢のなかなる炎かな

晩成の成はいつごろ万愚節

涅槃像拝む闕の艶またぎ

涅槃図の象の歎きは首のべて

涅槃図の裏側をゆく人の声

開帳や泥のつきたるままの靴

足どりのおなじ遍路の前うしろ

傍らの子に杓わたす灌仏会

縁側に居座る猫や灌仏会

濡れづめにして夕暮れぬ甘茶仏

ひところのわれをかへりみ啄木忌

▼動物

長靴の左右に倒れ猫の恋

トランプを一枚めぐり猫の恋

星の下猫の恋また人の恋

亀鳴くを聞きたくて長生きをせり

つぎの世は亀よりも蛇鳴かせたし

こきりこや蝌蚪の踊れる水のなか

この蝌蚪の黒きかたまりいつ現れし

蝌蚪散って天日のみの残りたる

柱時計音をひきずり夜の蛙

遠蛙田の面は翳り濃くしたる

そのままでもよろしからむと蛙鳴く

鶯や赤土色の崖を過ぎ

うぐひすと思ひしときはもう鳴かず

うぐひすや温みののこる昼の飯

うぐひすや雑木林もいつか失せ

やうやくに近づいてきし初音かな

鶯の満足の声昼闌ける

うぐひすや朝の素早き身拵へ

ぶつつけ本番雉子は一声叫びたる

子をあやす言葉つたなし夕燕

母生れし家を自在やつばくらめ

眩しければ燕も来ずよ石廊崎

燕来る山の空気の切れ味に

つばくらや幟下せし金丸座

一湾を退く潮や初燕

燕に真青な空つづきけり

初燕飛び立つまでの縁かな

雁帰る浜の藻屑は黒きまま

残り鴨水を出てすぐ日向あり

鳥帰る海峡の灯をあまた見て

轉りに応えて朝の水の張り

轉りのたちまち社とりかこむ

轉りのなか裏声の九官鳥

轉りや大樹の昏きところより

俎板のまつさらにして桜鯛

わかさぎを薄味に煮て暮色くる

瓦礫を飛ぶ初蝶どこまでも瓦礫

初蝶にとらへどころのなき日射

白き椅子に一度は止まりたき初蝶

緑蔭を出でて白蝶おちつかず

明暗の際とぶ蝶を見失う

白蝶のおびただしきに囲まるる

蜂死ねりうねりにうねる海の碧

足垂らす蜂と親しき時しばし

渡舟まで荷についてゆく山の虻

▼植物

梅林を額明るく過ぎゆけり

白梅に穹ゆくひびきうすれつつ

梅一輪こぼせし風が眉にくる

足にもつれる犬の幸福 梅林

梅林を音通りぬけ地鎮祭

母の魂梅に遊んで夜は還る

梅が香や母の常着は闇に垂れ

尼寺をとりまく梅の咲くちから

白紐の手よりほどけて梅の昼

梅咲くや飛白模様のシネマ見て

白梅をひとの過ぎゆく温みかな

「休み」とも書かずに休む梅の茶屋

梅の香にゴッホの絵などちよつと無理

梅林顔にまつすぐ日のあたる

紅梅の隙間からくる悪寒かな

仏壇にひるのともしび紅椿

日おもての椿太鼓の音奔る

眼に見えぬ糸の張られて白椿

墓山のむこうに暮れる椿山

海鳴りは夜の音となり椿山

海鳴りの闇に椿が蕊を張る
井戸蓋に落ちしばかりの紅椿
白張りて法然院の貴椿
あはやとはいま紅椿落つるさま
海流に日の強く照る藪椿
紅椿濤音も夜に入りゆけり
糸ざくら背山の冷えの及びたる
朝霧の重なりあふも紅枝垂
さくら咲く日々にて何かもの足らず
見馴れたるさくらなれども寄りて見る
ひとごちつけばさくらがまつさかり
ごはんつぶよく噛んでみて桜咲く
絵本の中きつと途中で桜咲く
桜咲きそめしそらの日昏れかな
ゆきずりのここにも咲いてゐる桜
部屋の隅さくら明りの朝を得し
一心に生きてさくらのころとなる
朝ざくら風音は天過ぎゆくも
日の桜呆けて居りぬ人もまた
晩年の思ひとはこれ夕ざくら
夕ざくらやさしきものはやはらかし
閉まりたる戸の奥に音夕ざくら
あれは何時の思ひ出なりし夕桜
花の道母のぬき手執りゆくも
母とゆく花のほそ道湿りけり
花の日々われにかかはりなく過ぎぬ
ふたりづつふたりづつ花の中に入る
花の中みなおろかなる顔となる
もの食いては皿洗うなり花の夕
花びらを少し吹き入れ日の格子
母ねむり葛湯さめゆく花の昼
薄紙につつむ花びら最晩年
遠山へ喪服を垂らす花の昼
花びらのときに入りこむ蒲団部屋
花びらの階段に散り昼の客
花咲いてのちをしばらく昏らく居り

名水の見えて降りゆく花の崖
笛の音に花の散りたるひとしきり
水流れては時流れ花の昼
常緑の一樹のほかはみんな花
念仏のたゆたひてゐる花の中
青空や花は咲くことのみ思ひ
花の窓へ宿の廊下のゆきどまり
いっになく人訪ふころ花の昼
大阪の花の中なる遠忌かな
料亭の手摺の艶も花のころ
突風や花噴きあがる花の中
いっせいに花咲き音なしの構へ
はなびらのいま花屑となる途中
朝よりの花びら浮かべ池の水
花のなか太き一樹は山ざくら
八重桜夕日落けては紅流す
莫菴の上にひとの娛しみ八重桜
鶏の胸張って昼どき八重桜
土を掘るにぶき音せり八重桜
道すでに深山に入りぬ遅桜
さくら散り水に遊べる指五本
平行棒への一心 さくら吹雪のなか
剥製の雉子に玻璃越し花吹雪
水音で充たす一日さくら散る
落花のなかことに激しき落花あり
花筏となるまでの花たゆたへる
何といふことのなき日のさくら散る
池水に流るとなく落花蜜
花筏草陰にすぐ滞る
鉄鉢や施米にまじるさくら薬
塵としてややうづたかき桜薬
沈丁に夕べのあをさまさりくる
藤の花ほつりと夫を待つ日暮
藤の下犬無雑作に通りけり
藤房の色より来たる夕べかな
馬の鼻ふくらむ 桃の風ふけば

あけぼのの木芽しづかに雫せり
松の芯バケツの水のまだ揺れて
杉花粉僧の行手の山に降る
杉花粉日輪うすく過ぎゆくも
春落葉山の湿りになじみつつ
菜種咲けばしばらく菜種色の川
翔つ鳥の腹やわらかく花菜畑
透き水のさざめき通る山葵沢
鴉さわぐ朝のわさび田伊豆山中
みちびかれ道は葦の野へつづく
すかんぼの一本を折り山の雨
蕨より高きものなし名無し山
伊吹嶺の昏れつつありぬ蕨飯
芹の水に小銭を落す婆の昼
山翳や村に入りゆく芹の水
蓬摘む波音遠し小松原
蓬摘む一円光のなかにいて
帯馴らす後手茅花あかりかな
日あたりてひじき採りたるあとの岩

■桂信子の句 「夏」編

▼時候

水中にまつすぐ下す糸の夏
白波の立ち上りたるときぞ夏
底知れぬ井戸をのぞけり夏立つ日
樹々の香のなかへ入りゆく立夏かな
水の綾さまさまに夏はじまれる
ものどもに夏は来にけり笛太鼓
見つむるも何もなき空夏となる
紙函のまんなかへこむ薄暑かな
中京や川瀬の音も夏立つ日
六月や東京までの無言の旅
水底を六月過ぎてゆきにけり
六月や洗ひざらしに糊きかせ
ひとり身にいきなりともる晩夏の灯
すでに晩夏草ぬきんでて昏れる山

風吹いて晩夏の景となりゆける
一木のうしろ百木夏の暮
道順はここを真直ぐ夏の暮
夏の夜の過ぎゆくものの杳として
短夜の暈に厚きあしのうら
三伏や奈良のあたりのうす煙
海峡のまんなかを航く大暑かな
灼け砂に空瓶うまり人の影
方丈の風に泛きたる紙涼し
山ひとつ湖に映して影涼し
料亭に松を眺めて昼涼し
涼しとも蓮の間の舟の路
方丈の柱の陰にみて涼し
粹といふこの一筋の涼気かな
黒といふ涼しき色を着給へる
まつすぐに来る波涼し音もなし
水滴の間のびしてをり夏ふかし
蚊を打ちしてのひら白く夏をはる
土瓶より濃き茶出でくる夏の果
湯のなかに沈むタオルや夏の果
ふり返るあまたの顔や夏の果
浮子ひとつ竿に従ひ夏の果
逝く夏の今日ひとときの空の色
夜の秋の影を大きく祖谷泊り
夜の秋鼠てのひらかざしけり
身のうちに匿ふ深傷夜の秋

▼天文

釣人の位置また変り雲の峰
雲の峰何引つ提げてゆくべきや
夏の月蒲団を海に沿うて展べ
涼風を通す柱の黒光り
梅雨の手足短く老いにけり
梅雨の石 犬の鼻先そこ過ぎゆく
山の湯に桶ひびきこの長き梅雨
梅雨前の闇のなかなる大樺

梅雨の月志賀のみづうみ銀放つ

一日の通り過ぎたる梅雨の闇

何の荷ともなく背に負うて梅雨に入る

夕景に人を容れざる梅雨の橋

朴の葉を打つ夕立のはじめの音

さるをがせ大夕立となりにけり

山に佇ちむかうの山も夏霞

川二つ寄りゆくあたり夏霞

一瞬の虹アンソニー・クイン死す

遠雷や山のかたちを山覆う

四十川に白波を見ず梅雨曇

禅寺の松のしかかる梅雨ぐもり

五月閻羅漢のうしろ羅漢立つ

朝ぐもり水面に触れて虫のとぶ

打水の母にはげしき西日射す

大阪の西日真向より来たる

西日つよきいま大阪の河の面

船煙かすか無傷の炎天に

炎天に一樹の影の地を移る

炎天の道は峠を越えてゆく

炎天や鬼に金棒など要らぬ

▼地理

夏山のうしろより入る伯耆かな

いくたびも日照雨過ぎたり青信濃

富士山のほかは目立たぬ夏の山

茶柱の立つ夏富士のふもとかな

たてよこに富士伸びてゐる夏野かな

水たまり天を映して夏野かな

夏海昏るつめたき青を横たへて

夏の海これより先は海の夏

夏怒濤海は真を尽しけり

舌の上に渋茶のこれる卯波かな

新聞紙畳にふかれ土用波

山々を沈めて田水張る越後

まつさきに映る自転車田水張る

人遠く歩める青田ぐもりかな

松風のひびく泉の底に貌

三室戸寺一条の滝かくし持つ

滝水の末に鍋釜ひたす村

▼生活

昔セルといふものありき樹に凭れ

水辺まで出るごわごわの宿浴衣

杉山に斜めの雨や宿浴衣

潮の香のまぎれもあらず宿浴衣

白地着て蓮池の風ふわと受く

白地着て抜き差しならぬ昨日今日

亡き父も亡き兄もあて白紵

ゆきずりの日傘をたたむ廓あと

渡し舟潮の耀りを日傘うち

理髪店の鏡日傘のいま通る

夏帽の下照り返し舟の波

夏帽子ホテルは扉つらねたり

夜の風に壁博つてゐる衣紋竹

鰻の日近しと夕べ肱まくら

天窓の光り囿りに心太

心太みづうみ遠く煙りたる

よく見える氷屋の旗杉木立

掻き氷奈良の駅にて別れたり

少しづつ飲んでなくなる氷水

ビールほろ苦し女傑となりきれず

山上に強き灯洩らす夏館

夏館灯の消えて波とどろけり

夏灯呆とひとは眠りに入るならむ

陶枕に間遠となりて寄せる潮

日覆のはためきつづけ午後の波

青簾のむかう艚音の往き帰り

籐椅子に新聞いつも荒だたみ

身じろぎて扇をおとす通夜の客

眺むるとなく開きをり奈良扇

船頭の毛脛まぢかに涼み舟

とり立てて言ふこともなし夕涼み
川床にゐて隣の川床のひとを見る
目の前に舳先あらはれ舟遊び
舟遊び畳のへりの砂踏みて
遊船のみるみる岸をはなれけり
見覚えの棧へボート揺れて着く
若き四肢ふんだんに使ひヨット出す
大花火何といつてもこの世佳し
花火の下黒き頭あまたうごめける
箱庭に天のかげりの過ぎてゆく
日本海の端に網投げ裸稼業
昼寢覚椅子の脚より見えて来し
瓶ふつて虫をころがす夏休み

▼行事

薄暗に口あんぐりと夏芝居
手の影の皿に大きく巴里祭
海開き神官冠おさへけり
祭月洛中に水匂ひけり
祭着や幼なの箸の上げ下し
縁側にゐて暮れそむる祭かな
ほかならぬ憶ひのなかを祭笛
尽き果つるまでがわが世や祭笛
祭笛遊びごころとなりゆける
薄闇に蹴拭きゐる夏越かな
河童忌の白紙をはしる墨の色

▼動物

葉裏より不意に鳴きたる雨蛙
墓大きな月がうしろより
ひきがへる祖母のいつしか坐りある
どのやうなことになるかと墓
草の根の蛇の眠りにとどきけり
蛇の目に葉草うねりはじめけり
くちなはの口惜しといふ眼を見たり
白昼の風ふきかわる蛇の衣

郭公や夜明けの水の奔る音
郭公や靄のなかより山の形
霧の中稚拙こもごも水鶏笛
柔肌の鮎の身金串ぬかれけり
閑暇憂し金魚は昼の水に浮き
子への愛知らず金魚に魅をうかす
ゆきつくは社殿の鏡ほととぎす
頸すでに老いて金魚をのぞきこむ
金魚鉢に水の衰へ昼ふかし
人の言ふ老とは何よ大金魚
目高の水に映ってからの子の午前
新幹線車中を鰻飯通る
砂にみじめなくらげで海なりも昏れる
鎌倉やことに大きな揚羽蝶
虚空よりとつて返せし揚羽蝶
裏返る大蛾に朝の湖はあり
山の闇白蛾あまたをしまひけり
遠き世の白蛾となつてしまひけり
蛭もう別の生きものが射せば
牛の鼻の影の近づく水すまし
水すまし水の四隅にゆかず昏る
雲踏みて今も昔もみづすまし
蝉声に流れをはやめ峽の雲
蝉なかぬ山つらねたり越後線
水際に蝉の一生のありにけり
まくなぎや門前町のはずれより
菓子つまむ蟻ころしたる指をもて
石畳ばかり誤算のかたつむり

▼植物

ひたすらに赤し颱風前の薔薇
薔薇園の鉄柵に手をふれてゆく
ぼうたんの薬ふかくして蟻うごく
牡丹のなかより虫の貌が出て
紫陽花の醸せる暗さよりの雨
錆び音と共に開くドア―濃紫陽花

木苺にかかる埃も旅半ば
鼓の音いっしんに立つ夏木あり
若葉からまっすぐに来る朝の風
女五人みどりの出羽に衣を翻す
緑ゆるがす風ばかりなる天城越え
樹の茂り草の茂りも世田谷区
緑蔭に蟻の一日ながかりき
裏道に緑蔭が見えそこへゆく
緑蔭や水際に魚の匂いして
若楓奔流町の端を過ぎ
鳥一羽強気の声の花卯木
花桐にすでに脈打つ朝の町
山々ををさめし闇や朴の花
沖の荒れ合歓はねむりの中にいて
落ちてより目立つことなき夏椿
雨雲のましたあやめの色の濃き
膝の砂あやめの水に払ひけり
あやめ咲き雨戸の多い家に棲む
一八に使いはじめの飯茶碗
睡蓮の水に行き交ふものの影
奈良格子の奥に露煮る匂ひかな
蓮池のいよいよ雨を交へけり
暁の蓮の台に坐りたし
笠のうち目のみ動きて苗を植う
そこまでは灯ののびている夏蓬
夏萩におかれひとつの机かな
昼顔にうしろを見せて男帯
十薬に一点の雨廃工場
十薬の花の近くの灰かぐら
あかつきの萍たたく山の雨
萍のいつか寄りゆく水漬き舟
萍に絶えず虫来る山の昼
遠富士へ萍流れはじめけり
萍の隙間怖れし昔かな
抽斗の黴の聖書を怖れけり

■桂信子の句「秋」編

▼時候

秋の土鷄のみつむるもの動く
四五人に日向ばかりの秋の道
秋すでに風のひびきの湖西線
水汲んで水を動かす山の秋
栈橋を端まで歩く秋の昼
横顔に傘の雫の飛んで秋
傘立に傘がまつすぐ立つて秋
汐ひきしあとわらわらと秋の蟹
もの置かぬ秋の机を憶ひけり
はじめより高音朝の秋の鳥
暮れそむる辺りに秋を思ひけり
秋航や半島長く日当れる
秋となるまでのわが身のおきどころ
これが秋鏡のなかのもの吹かれ
やうやくに秋のかがやき水の綺羅
一夜経て波のかたちのすでに秋
雲は秋木の考へてあたりけり
初秋の草のかこめる真水かな
初秋やひそめるものの声きこゆ
八月をかたはらにおく三尺寝
八月や兄の帽子が遠ざかる
川半ばまで立秋の山の影
秋立つや鐘をつかんとのけぞれる
秋といふ身にしむころのきたりけり
身もそぞろ秋立つ風よぎるさへ
一羽毛ただよふ秋となりにけり
音もなく水の流れて秋となる
立秋や何かを思ひ立たねばと
さまざまの雲ゆきあひて秋に入る
秋暑し泥の乾きし築地堀
秋暑し一木のみ日あたりにけり
もろもろのもの尖りだす九月かな
窓閉ぢて九月はラフマニノフの曲
二階から声のしている白露の日

闕をすべる雨戸いくつも白露の日
つる細き眼鏡を探す白露の日
白露の日石段ひとつづつ降りる
山の木のはつきり見えて白露の日
口むすぶ鯉みて帰る秋彼岸
秋彼岸石階の端砂たまり
みごもりしことなし肌立秋日あつし
かがやきて髪も秋日のものとなる
時計師に微塵の秋日身のまわり
朽ち舟のどうにもならず秋日中
秋の暮鶏はいつまで白からむ
炎える火のふしぎな私たち秋の暮
海照らす日は真正面秋の暮
秋の夜を笑ふひとなき淋しさよ
大空の何待ちて澄む何も来ず
緻密に冷える夜気 葡萄酒のぶどう色
母とわれ夜寒の咳をひとつづつ
坐す牛にそれぞれの顔秋深む
秋ふかし夢二の女灯をともし
秋深し木は年輪をいとなみつ
逝く秋のからくれなゐの心意気
逝く秋のあからさまなる山の容
冬近し黒く重なる鯉の水

▼天文

よれよれの禰宜の袴や秋日和
一湾に漁ながき秋日和
石の上に落す鉛筆秋早り
秋空や高きにおきて志
これをしも秋空といふ藍の色
秋雲や画家のガウンの裾短か
都さす貨車が連なり翳雲
庇より周防の国の翳雲
老婦人のピンクのパジャマ翳雲
すゝき原水なき川を月照らす
男臥て女の夜を月照らす

月の夜の枕ひきよせ寝るほかなき
ひとりとしてひとり歩める月の街
やはらかき身を月光の中に容れ
水底に泥のかぶさる月の村
月の出て暈の縁の足ざわり
関門の引き潮さわぐ砂月夜
早鞆に月の潮路の立ち騒ぐ
月明の杭に通ひの舟きしむ
月明のことに雪被し富士の山
月明の奈良もはづれの一寺なる
湯の町の片側暗し十日月
真夜かけて窓わたりゆく月ひとつ
魂は売らぬ雲より雲へ月
月出でて海峡をゆく一漁船
広縁を拭きたるあとの良夜なる
岸の波打ちあつてゐる無月かな
海の底うねりつづける無月かな
辛口の人の集まる無月かな
後の月長門周防を照らしけり
この年の雨に終りし十三夜
流星やすでに妙義をかくす闇
秋風の窓ひとつづつしめゆけり
目に触るるものみな乾き秋の風
鮑屑の小さな旋回 秋風路地
秋風を来て鼻筋の通る馬
秋風や細身の傘を巻きながら
蛇籠より洩るる水音秋の風
秋風に松斜めなるままが佳し
秋風や心の傷は覆ふなし
秋風をやりすごしゐる草の丈
秋風やいつも気になる蝶番
よく歩くひとに交りて野分あと
駅弁の黒きこんにやく雁渡し
ふりほどく老婆の髪へ秋の雷
秋雷をひそめし嶺の黒く聳つ
夜霧濃し厚き母の掌に手をおけり

霧の中むなしさのみぞつきまどふ
鉄塔の間のさびしさを霧満たす
毘もろとも猷がうごく霧の底
セロファンにひびく霧笛よ葉のむ
いただきは霧がとりまく国境
霧笛の尾長き朝や壇の浦
葦舟の声のとどかず湖の霧
霧のなか音無川の音ばかり
栲りの背霧にかくれてしまひけり
露の灯の陽とさしかわる牛乳店
露けしや撞木の縄の宙とんで

▼地理

秋嶺の闇に入らむとなほ容
平らなるひろがりになり水の水
なればなるやうになりゆく水の水
舟影のすすむともなく水の秋
やさしさは日にひろがれる秋の潮
秋の浜煮ものの湯気のそば通り

▼生活

木洩れ日の素顔にあたり秋裕
秋裕母の匂ひをわれも持つ
箱階段下りる足音新豆腐
新米や蔵の陰ゆく猫車
濁酒太郎もいつか眠りたる
母老いてパン喰みこぼす秋の灯に
なほ励むこと持ち吾も秋燈に
志高きにありて秋簾
弁当のまはりの塵や松手入
松手入バケツの水に松葉浮く
遠山も風の案山子も伊賀のうち
昼ふかく稲刈る音のすすみくる
稲架日和空気がいしくなりにけり
石臼を庭石として豊の秋
徳利をあの世の供に豊の秋

道の辺に雨後の川音崩れ築
尾道のきれいな猫の秋思かな
運動会草深く日の射しにけり

▼行事

街中を鳥歩ける終戦日
敬老日豆腐の上を水流れ
純毛の服に日あたり文化の日
留守の家の七夕笹の枯れし音
汲みおきの水に夜がくる盆の家
起き伏しの枕ひとつや盆の風
左京区や電柱寄りに大文字
角伐らる鹿に小さき枕あり
果てるころ月明となる村芝居
出番待つ馬話しあふ村芝居
村芝居翁の笛のとうたらり
山々に深空賜わる秋祭
放生の魚を眺めて岸にあり
門川を流れる風や地藏盆
地藏盆筵にうすきところあり
兵児帯の房の絞りや地藏盆
鉄燭の壁に影おく蛇笏の忌
蛇笏の忌寸鉄の句をつくらばや

▼動物

秋の鹿老の近よることく寄る
飛火野の小流れに佇つわれも鹿
秋の蛇水にかくれし匂ひかな
見られつつしばらく居りし秋の蛇
欠け茶碗水に瞭らか鳥渡る
一天の翳りなきとき帰燕かな
稲雀波うつ山にむかひ飛ぶ
鳴なくや見送るひとなくて出づ
鳴はやもけたたましわが誕生日
鳴の昼古き写真のわれ笑ふ
椅子の背を一回まわし鳴の晴

ああ言へばかう言ふ賜と思ひけり
ともしびのひとつは我が家雁わたる
雁をきく敷布の皺をのぼしつづ
かりがねや手足つめたきままねむる
中天に雁生きものの声を出す
他郷にてしきりに鯉の飛ぶ日なり
水中に石段ひたり鯉の潮
岩鼻へわたす板切鯉日和
家裏に潮の満干や鯉日和
ひぐらしに樹々の残照なかりき
ホテルはともす 鳴くかなかに似合う灯を
かなかに絵筆を洗う水の彩
庭石やいま微に入りし遠ひぐらし
鯛の一樹はなれし湖畔かな
門をかけて見返る虫の闇
虫しげし四十とならば結城着む
音立てぬ虫いて青む夜の暈
蟬絶えて虫絶えて何もなき野末
こほろぎのうかべる水を地に流す
ひとり臥てちちると闇をおなじうす
誰がために生くる月日ぞ鉦叩
きりぎりす腰紐ゆるめ寝ころべば
ひとりねのひるの底よりきりぎりす
きりぎりす足元の草直立し
はたはたの翔んで隠れて湖の国
盤石に青蠅の細肢透く
いつ遺句となるやも知れずいぼむしり

▼植物
水中になほ水はじく水蜜桃
柿に耀る陽はかげりきて海に耀る
柿の色脳裏に荒れし海を見る
柿耀りて牛にしづかな刻うつる
熟柿掌に受く断りきれなくて
灯れば寂かさのまゝ耀る林檎

りんご掌にこの情念を如何せむ
いちじくの葉蔭に遠く耕せる
大津絵の鬼が手を拍つ紅葉山
神官の遠くを歩く紅葉かな
黄落のなかをただよう小海線
黄落や片膝立てて山の湯に
黄落や表戸ぬらす朝の雨
黄落や梯子おかれし土の上
ポタージュの厚みを唇に黄落期
まつさをき穹にくひこみ銀杏の木
城壁に木の実落ちそのままの夜
降る木の実水中半ばまで見えて
低き地へ水は流れて一位の実
どんぐりの落ちて日あたる山となる
カンナの黄視野いっぱい熱上る
朝顔むらさき海に裏側みせて棲む
皺のばす朝顔の種つつむ紙
朝顔の平らにひらき海の風
眩しみて白菊の辺に撮られたる
白菊に起ち居しづかな日を重ね
夫なくて子なくて白き菊咲かす
白菊に触れむと農の大きな指
わが身また糸瓜にひとし垂れ下る
世の中のよくも悪くも糸瓜垂る
長考は山の芋より始まりぬ
遠くほど光る単線稲の花
ただならぬ雲のかたちや稲の花
波音に唐黍を焼く火を落す
敗荷のまはりの雨のこまかなる
生きもののぬくみをうつす秋草に
何となく佇てば秋草そよぎけり
萩の葉のこまかきにわが脛入るる
飲食のかすかな音に萩昏れる
萩の辺りまできて光る貝鉦
萩の風白猫は絵のなかで臥る
萩叢をゆるがす風や鶴の胸

夕闇の萩群ざわとあるばかり
卓袱台のありしころにも萩に風
誰彼の声のやさしく花芒
湖消えて昼の穂芒湧くばかり
雲かはるがはるに伸びて薄原
白薄水嵩はげしくなりにけり
芒野やひとの決めたる国境
芒原戻り道などある筈なし
とどきたる夕日しばらく葛の谿
まんじゅさげの意味なき赤さ入日中
曼珠沙華噴く火を山の際にまで
桔梗挿す壺の暗さをのぞいてから
桔梗の間に運ばれし朝の粥
いちにちの終りに会ひし烏瓜
縄張りの縄新しききのこ山
毒茸を掘って真昼の日にさらす

■桂信子の句 「冬」編

▼時候

ゆでたまご口いっぱい冬の旅
送電線にいつも平行冬の旅
二階踏む昼の足音冬金魚
片足にまといつく紐冬畳
一隅に冬の匂いの乱れ籠
深川や竿竹売りも冬の声
宿の廊つきあたりたる冬鏡
葛根湯身の一冬を支へけり
中辺路の山にこだまし冬の音
国旗出すひと小さく見ゆ冬山家
冬遍路入日の金をまとひけり
谿川のいつの間にもこの冬の音
真昼間のひとり遊びや冬金魚
眦を決すとまではゆかぬ冬
はつ冬や刃物を入れて水動く
帆柱に十一月の光かな
水中に滝深く落ち冬に入る

水甕の水に浮く塵冬に入る
冬に入るけもの逆毛撫でながら
燈明のまわりが空いて冬に入る
立冬の暮色は沼の底の色
もの入れし袋の容子冬となる
眼帯や片目の街の冬ざるる
亀水に平らに浮きて冬ぬくし
桶あれば桶をのぞいて十二月
十二月緋の緞帳の長く垂れ
十二月こちらの本をあちらへ積み
霜月の水かがやけり咳ばかり
松の根にふきたまる砂冬至波
陸橋の遠く日あたる冬至かな
波の上に遠き日を置く冬至かな
火の端に残る紙片や年の果
ねばならぬことのつづきて年終る
考へてもわからぬ国や年果つる
数へ日や一日づつの珠の晴
年逝くや闇にをさめし嶺あまた
大年の真闇に水を流しけり
部屋の際の赤き金魚と越年す
一月や油紋の海に雨の粒
一月や浄め塩散る石畳
相たのむ母娘の影や寒に入る
膝ついて松風をきく寒の入り
大寒の乾ききつたる橋わたる
大寒や魚の容ちに猫はしり
大寒の木々にうごかぬ月日あり
大寒の山中にして鍋たぎる
大寒のここはなんにも置かぬ部屋
大寒や野のはるかまで日当りて
紙屑をたきて音なし寒の土
寒の闇来て一燈に入る夜学生
倒木や石の飛び散る寒の谷
火搔き棒のまはりの火屑寒の闇
菜屑より流れはじめし寒の川

寒に逝くまこと俳句の鬼として
一度だけの波音冬日昏れにけり
親しみ受く冬日東京の三叉路に
昼も閉ざす燈台の扉の冬日向
呪文とけ冬日の亀が歩き出す
微塵ともならず真向う寒入日
若狭塗冬日は遠く海の上に
中辺路や冬日のなかに魚乾び
みちのくに見し片鱗の冬入日
弱火で煮るものの多くて冬の暮
道端に捨縄を踏む冬の暮
帯留を身よりはづして日短し
掃き出して仏間すぐさま寒気満つ
三寒の寒のつづきて四温なし
象の皺ゆつくりと見て春隣
春近し水輪のなかに水輪生れ
春近し九官鳥の唄ふさへ

▼天文

冬麗の気高き馬を引き出だす
冬麗や草に一本づつの影
寒月光男女つれだち出づること
寒月をまたぐに惜しき潦
寒風に出す七輪の火の粉の尾
木枯や帰りは空の出前箱
われによき師ありて北風をいそぐなり
北風に手を出せば短い言葉となる
一僧に喜捨の米粒初時雨
独り言いよよ時雨るる夜となりぬ
しぐるるやすうつと開きし宿襖
しぐるるや宿のはたきの遠い音
玻璃うちに黒き猫あてしぐれけり
火の奥の炎の熾んなる時雨宿
寺箒立てかけしより時雨かな
このごろや夕かけてくる時雨ぐせ
時ならぬ吹上御所の玉霰

霜の踏切越えてみなぎる朝の力
湖際のもの横流れ雪ぐもり

神棚の榊の真青雪催

霊柩車ゆき雪がふり今日をはる
窓の雪女体にて湯をあふれしむ
たまさかの雪なり出でて髪ぬらす
須臾にして雪ふりしくか子等のこゑ

貨車が来て粉雪一層荒れ狂ふ

雪のなか傘のうすくらがりよし
深雪ならむ朝の戸あけて声あぐは
雪ふれば雪ひねもすの窓ひとつ
鮎煮えてくれば粉雪となりにけり

旅にて使ふ鮮しき紙幣雪の駅

雪国の柄太き傘を借り出づる
雪墜ちて深雪ににぶき音うまる
靴先に散る雪きみの死は確か

ややあつて眩く雪の越後人
とんねるの雪なき国へ出でにけり
雪中の鷺に遠き灯ともりそむ

沖雲は雪はこびつつ湖の暮

雪の日の皿にぶあつき舌平目
何もかも遠くへ去りぬ冬霞

微光曳くもの生きていて冬の霧
寒夕焼反り身に魚の焼かれ居り

▼地理

駅長の閑雪嶺を立ち眺む

枯山の奥なまなまと滝一筋

遠雪嶺鉄扉ひらいて国旗出す

中腹に道の岐れる冬の山

雪山の前に目立たぬ雪の山

雪嶺のことごとく昏れ水の音

窓際のガラスコップや遠雪嶺

地の底の音をおさえて山眠る

鳥放ち山は眠りに入らんとす

地震知らぬかに山々の眠りけり

これからのことはまかせて山眠る
大き掌に枯野来し手をつつまるる
枯野に出てなほ喧しき女学生
子等帰り枯野浮遊の一風船
焚口は枯野にむいて昼の風呂
飛ぶ鳥に枯野のうねり川の耀
雪原のまひるは束となるひかり
枯園に息はづまする之が恋か
男女歩む枯園を枯園とせず
寒水に透ける冬菜と指の傷
電線を闇に走らす冬の川
朱塗椀冬波遠く逆立てる
冬荒れの波に日あたり小浜線
寒潮へひとを信じて鳴らすギター
白波や泡ののこれる冬の浜
霜柱牝鶏絶えず眸をうごかし
遠き音冬滝らしくなつて来し
冬の滝日輪白く過ぎゆけり
まつたうに落ちて冬滝ただ白し

▼生活

外套のなかの生ま身が水をのむ
干し蒲団叩く音する浜の午後
昭和果つかたまってゆく袈
手袋に五指を分ちて意を決す
破れ手袋三十の夢今以て
河豚雑炊次の間に闇満ちにけり
まんなかに餅のふくれる老姉妹
餅のひび深くて老の笑いあう
いちにちの大方餅を焼く匂ひ
底にまだ水餅らしきものあり
衝立の陰の声音や葉喰
四十近し湯豆腐鍋にをどらせて
煮凝りをくづす目玉はどうに無し
煮凝の白眼を最後まで残す
高さ縁めぐらす寺や冬構

湯ざめせし貌寒灯の下過ぐる
便箋の白に日あたる冬座敷
午後に入りゆるむ障子や池の水
気配して人の出でくる冬障子
湖の面の銀に障子を開け放つ
襖絵は狩野山楽牡丹の図
襖絵は名知らぬ絵師の寒雀
丁字屋のいつもの屏風「いろはにほ」
暖炉より笑声われのことならむ
暖炉ぬくし何を言ひだすかもしれぬ
暖炉もえわが身いとしむ刻となる
寂けさを欲りまた厭ひ炭をつぐ
炭つぎつ昼はそのまま夜となんぬ
鉛筆もてひろぐ炭火や夫はなし
さぐりあつ埋火ひとつ母寝し後
階段の裏のこたつを探し出す
炉の灰に昼の陽が射すひと待てば
炉火もえつぎたやすくひと日たちにけり
大火鉢畳の縁の模様かな
そば通り過ぎ冬耕のにぶい音
八十の母の焚火の勢い立つ
何もなき海見つくして避寒宿
雪兎昼までほつておかれけり
スキー担ぐおのおの温き家を出て
湯ざめして居り黙々と豆腐切る
たちまちにあられ過ぎゆく風邪ごもり
風邪の衿白きをあはす逢はんとて
風邪の身にながき夕ぐれきたりけり
二つ目の辻に嚏をのこしけり
忘年や身ほとりのものすべて塵
忘年の酒いささかの覚悟あり
忘年や話せば長きことながら
小肥りとなられし女将忘年会

▼行事

鶏のとさか珍らし七五三

夜空より大きな灰や年の市
歳の市裏通りより入りにけり
むつかしい一日が暮れ柚子湯の柚子
運び来しホテルの年越蕎麦ひとつ
十夜粥ぬくし本堂八方透き
ひとの頭のうすくらがりに十夜寺
十夜粥箸のまはりの灯影かな
雨傘を横に払うて親鸞忌
裏町の泥かがやけりクリスマス
凸凹の道踏み帰りクリスマス
クリスマスケーキこの荷厄介なもの
クリスマスツリーに関はりなき身なり
聖夜の伴に洗ひ熊などよからんか
この冬の意外なぬくさ 草城忌
一燈をつつむ冬靄草城忌
全集の濃き藍色や草城忌

▼動物

冬眠の蛇の真上を蹙音過ぎ
冬の犬糞まるに時を費さず
虚空にてかすかに鳴りし鷹の腹
鷹舞ふや海に入らむとして落暉
冬の鷺爪みじかくて老いにけり
一本の白髪おそろし冬の鴟
笹子鳴きふたゝび空はくもりけり
笹鳴や女ばかりの昼ながし
飯櫃の芯まで乾き寒雀
風わたることのしばらく浮寝鳥
遠嶺より日あたってくる鴨の水
水尾やがてさざなみとなる鴨の池
落日や横にはしりし鴨一羽
水の中われにかへりし鴨一羽
鴨の羽根浮きたる水の堰を越ゆ
どこにでもある軸垂らし鴨の宿
鱸の音のしばし過ぎゆく鴨の宿
金泥の水の落日鳴くぐる

身の果は知らず舞ひ立つ冬隼
白鳥の声のなかなる入日かな
白鳥の白鳥らしからざるもあり
裏口におろす荷鰯の尾が見えて
水底に昼夜を分ち冬の鯉
時々は泛く寒鯉の胴まわり
俎のどちらもむいても海鼠なる
たちまちに海鼠のつくる曇り空
何といふことなき昼の海鼠かな
海鼠から何が飛び出すかも知れぬ
年逝くや海鼠は海鼠の容して
たしかめてみたき海鼠の目鼻立ち
今なら殺せる冬の蜂昼匍ふ
冬蜂の死やカーテンの襞のなか

▼植物

室の花貌の大きな魚を飼ひ
中二階へ細身のてすり寒桜
汲みたての水揺れている冬椿
花八つ手花を散らして鉛の水
茶の花を梯子の影の過ぎてゆく
蜜柑の重さいつも頭上に蜜柑採る
ほんかんの皮のぶあつさ土佐の国
山の湯の湧きつづきつつ木の葉散る
絵硝子の裏を木の葉の降りつづく
夫恋へば落葉音なくわが前に
落葉搔く母に小走り 目ざとい鶏
落葉焚きそのあとの用次々湧く
落葉焚き風がとりまく火の柱
落葉降る途中の空や奥吉野
落葉焚き途中で急に無口になる
いづれ地に朽つる落葉を掃き寄する
朝に夕に落葉掃く日のなほありや
朴落葉真正面より吹かれくる
ひと日かけ裏返りたる朴落葉
冬の松日輪ひとつよるべなし

冬木より目づたふ雲のなくなりぬ
壁鏡冬木が遠く身震ひする
管理人室に入りこむ冬木影
寒林や道より細く水流る
スクーターに曲がる道なし寒林透き
寒林にまぎれず駆くる一騎あり
逢ふところまでいくたびも枯木過ぎ
画鋲ひとつ枯木に光り学園祭
浮世絵を枕辺にせり枯木宿
枯蔓の切尖に触れ水激す
山川の枯れゆくさまに遍き日
中辺路の一樹のもとの枯仏
水仙剪る錆びし鋏を花に詫び
水仙を二三日見て旅に発つ
水仙に変らぬひと日ありにけり
ソファーにいて葉牡丹の真正面
葉牡丹や女ばかりの昼の酒
共に焚かれ枯菊と縄似てしまう
枯菊に午前の曇り午後の照り
枯菊の終の香りは火の中に
枯蓮やうごくともなき池の水
枯蓮の日当ってゐる午前かな
枯蓮によんどころなき昼の水
枯芦へ落日は金放ちたる
枯芦の日あたってゐるところかな
枯葦の影の乱れも湖北なる
枯薄乱るるさまに日のまとも
ハンカチをていねいに折り冬葦

おわり